

なかま鬼における援助行動が 児童の援助自己効力感に及ぼす影響

上 野 耕 平

概要

本研究の目的は児童の援助行動に注目した鬼遊び(なかま鬼)を体育授業において実施し、児童の援助自己効力感の変容を確認すると共に、その変容に鬼遊びにおける援助行動が及ぼす影響を明らかにすることであった。本研究の結果、鬼遊びの種類に関係なく、鬼遊びへの参加を通じて児童の援助自己効力感が高まることを示す結果が得られた。なかま鬼は援助自己効力感を高める上で一定の役割を果たすと考えられるが、本研究の結果はなかま鬼自身が援助自己効力感に及ぼす影響はそれほど大きくないことを示していた。またなかま鬼では非常に多くの援助・被援助行動を経験できるものの、なかま鬼実施後の児童の援助自己効力感を説明するのは、なかま鬼実施前の援助自己効力感及び児童の援助行動に対する主観的評価であった。本結果から、援助自己効力感の変容には援助行動の実数ではなく、援助行動の頻度に対する児童自身の認識が影響を及ぼす可能性が示唆された。

キーワード：体ほぐし、援助行動、鬼ごっこ、鬼あそび、スポーツマンシップ

問題の所在

先般改訂された小学校学習指導要領(文部科学省, 2018)では、体育の目標として豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成が標榜され、体育を通じて運動に関する知識や技能の習得、思考力や判断力の育成に加え、学びに向かう力や人間性の涵養を目指すことが謳われている。児童の体力・運動能力の低下他、学級崩壊やいじめ、引きこもりなどが社会問題となるなか、社会的な態度の育成や道徳性の涵養といった役割がこれまでも体育には求められてきた(友添, 2005)。そして2020年東京

オリンピック・パラリンピックの開催を控えた現在、友情、連帯、フェアプレイ精神などオリンピック憲章(東京都教育庁指導部指導企画課, 2016)に掲げられるスポーツの価値とも相まって、体育のフェアプレイ教育に対する期待はさらに高まっていると言える。

こうした現状の中、上野(2014)は児童期において育成すべき社会的態度として「援助行動」に注目し、援助行動が頻繁に行われる鬼あそび(なかま鬼)を開発した。そして上野(2017)はなかま鬼のルールを整えると共に、児童の援助行動に対する自己効力感を測定できる尺度を開

発した上で、なかま鬼への参加を通じた児童の援助自己効力感の変容について検討した。その結果、運動遊び場面におけるなかま鬼への参加を通じて児童の援助自己効力感が肯定的に変容する傾向が認められることを明らかにしている。その後上野ら(2018)は、学校体育で運用できるようなかま鬼の実践方法を改良した上で体育の授業場面で実践した結果、なかま鬼への参加を通じて児童の援助自己効力感が肯定的に変容すること、さらになかま鬼参加中の援助行動が援助自己効力感の向上に関係することを示す結果が得られたと報告している。

向社会的行動の一つである援助行動は、個人主義が進む現代社会においてこそ重要であり、学校現場において助長されるべき行動であると考えられる。Midlarsky(1991)は援助経験が次なる援助行動を生み出す過程について、援助行動を行った結果得られる人生の有意義感や自己効力感の高まり、肯定的な気分などの援助成果を感じることが、援助行動に対する動機づけの高まりを導き、ひいては次なる援助行動に繋がるとするモデルを提唱している(図1)。Midlarsky(1991)に従うならば、援助行動の結果得られる心理社会的援助成果である援助自己効力感、他者を援助する動機づけを高めることにより、次なる援助行動を促進すると考えられる。しかし、上野(2017)、上野ら(2018)による研究成果は、なかま鬼への参加を通じて援助自己効力感が高まる可能性を示しているものの、なかま鬼参加中のどのような経験が援助自己効力感の肯定的変容に影響を及ぼすのかについては明らかにしていない。なかま鬼が援助自己効力感の変容に及ぼす影響を説明する上では、鬼遊びにおける援助行動の影響について明らかにする必要がある。

そこで本研究では、鬼遊びにおける援助行動として、1) 援助行動の実数と、2) 援助行動に対する主観的評価に注目して、児童の経験内容を確認する。

援助行動の実数は、鬼遊び中に仲間を助けた行動の実数を指している。Bandura(1977)によれば自己効力感の向上に最も大きな影響を及ぼ

す要因は「遂行行動の達成」であるとされており、本研究では援助行動の実数がそれに最も近いと考えられる。他方、これまでのなかま鬼の実践を通じて、援助行動には鬼に追われている仲間に近づいて積極的に助けようとする援助以外にも、助けを求めて近づいてきた仲間と手をつないだだけの援助も認められる。援助自己効力感の変容に関係する援助行動としては、ただ手を伸ばしただけの援助よりも、積極的に仲間を助けた経験の方が関係すると予想される。従って実数の計測に際しては、援助する側の自発性を基準として行動を分類した上で実数を確認する必要がある。

援助行動に対する主観的評価は、鬼遊び中に仲間を助けた頻度についての主観的評価である。上野ら(2018)においても援助行動に対する主観的評価が測定されているものの、児童の実際の援助頻度を簡易的・代替的に測定する方法として用いられるに止まっている。一方で、援助行動の実数を測定する方法との比較において、実際に援助したとする児童の主観的評価は、児童にとっての真実を示している。従って、援助自己効力感の変容に関しては、児童自身による主観的評価の方が映像を通じて計測される客観的事実よりも影響を及ぼす可能性があると考えられた。

なお援助行動に関する研究では、援助される経験(被援助行動)についても、援助に対する

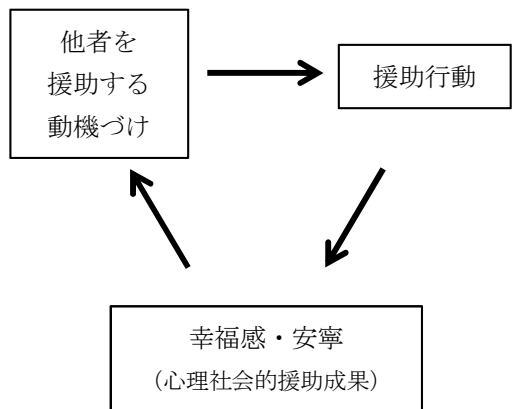


図1 援助動機、援助行動、肯定的心理社会的援助成果の相互関係に関する概念モデル

肯定的な態度を生み出すことで、後の援助行動に対する動機づけを生み出すとするモデルも認められる(高木, 1998)。そこで本研究では、援助行動の実数及び援助行動に対する主観的評価に加え、被援助行動の実数及び被援助行動に対する主観的評価を加え、それらが援助自己効力感に及ぼす影響についても併せて確認する。

方法

調査対象者

香川県内の公立小学校3学年の2クラスに通う児童51名の内、2回の実践に参加した上で、実践前後に行われた調査に回答した50名(男子23名, 女子27名)を調査対象者とした。

手続き

調査対象者はクラスごとに、「なかま鬼」及び「しっぽ取り」の2種類の鬼遊びを実施する授業にそれぞれ参加した。その上で以下に示す質問に回答するよう求められた。さらに鬼遊びの様子については2台のビデオカメラを用いて映像が撮影され、後述する要領で鬼遊び中に行われた援助・被援助行動の実数について計測が行われた。

質問紙

援助自己効力感尺度 上野(2017)が作成している援助自己効力感尺度(低・中学年児童用: 1因子, 6項目)を用いた。授業の参加前後に児童は「(1)できないと思う」から「(4)できると思う」までの4件法で回答を求められた。分析には全項目に対する回答の平均値を用いた。

援助・被援助行動の主観的評価 鬼遊び参加中の援助及び被援助行動の頻度を確認する目的で、1) 仲間を助けるために動くことができた頻度と、2) 自分を助けるために仲間が動いてくれた頻度について回答を求めた。質問への回答は「(1)まったくできなかった(まったく助けられなかった)」、「(2)時々助けた(時々助けられた)」、「(3)よく助けた(よく助けられた)」、「(4)ずっと助けていた(ずっと助けられた)」までの4件法で行い、分析には回答の値をそのまま用いた。

本研究では鬼遊び参加前後における回答を児童ごとに対応させる必要があることから調査は記名式で行われ、本研究者が調査用紙を児童に直接配布した上で実施し、その場で回収する方法により行われた。

援助・被援助行動の実数の計測

ビデオカメラを用いて撮影された映像に基づき、児童が鬼遊び中に実際に行う援助・被援助行動について計測した。

援助行動 児童が鬼遊び中に他の児童を助けた行動について1) 積極的援助(積極的に行動して助けた)、2) 消極的援助(助けを求めて近づいてきた仲間を助けた)、3) 間接的援助(鬼を混乱させることで仲間を逃がした、鬼をブロックすることで仲間を逃がしたなど)に分類した上で、それらの総数と共に援助行動の実数を計測した。

被援助行動 児童が鬼遊び中に他の児童に助けられた行動について1) 直接的被援助(仲間が積極的に助けに来てくれた)、2) 互恵的被援助(互いに逃げる選択肢がなく、近くの仲間同士で互いに助けあった)、3) 強制的被援助(逃げている時に援助者が一方的に捕まえて助けてくれた)、4) 間接的被援助(仲間が鬼の気を引いて助けてくれた、鬼をブロックすることで逃がしてくれた)に分類した上で、それらの総数と共に被援助行動の実数を計測した。

鬼遊び

しっぽ取り バレーボールコート半面の広さの四角形の枠内で、6人もしくは7人を1つのグループとして行われた。児童は1人の鬼とそれ以外の逃げ手の役を交代しながら務めた。逃げ手はしっぽ取り用に市販されているしっぽを腰の部分に装着した。開始の合図の後、逃げ手の児童は鬼にできるだけしっぽを取られないよう枠内を逃げ回った。しっぽを取られた児童は枠外に出ることとした。

なかま鬼 しっぽ取りと同じ広さ、グループで行われた。なかま鬼では6人もしくは7人の児童が1人の鬼と逃げ手5人の役を交代しながら務めた。逃げ手の児童は鬼にタッチされないように枠内を逃げ回るが、逃げ手の児童同士で

手をつないでいる時、鬼はタッチできない。逃げ手の児童は一度に1人の児童としか手をつなぐことはできない。逃げ手が鬼にタッチされた場合は、一端止まった後、鬼の合図で再度追いかけて直した。開始前に「自分だけが助かるのは簡単である一方、鬼に追われている児童を助けようとするに価値がある」ことを、授業担当教諭が説明した上で実施した。

いずれの鬼遊びにおいても、児童は1分程度で鬼役を交代しながら繰り返し鬼遊びを行い、授業時間の途中でしっぽ取りでは逃げ方や追いかける方について全体で振り返った。なかま鬼ではそれらに加えて助け方についても振り返りを行った。その後再度鬼遊びを続けた後、授業の振り返りを行った。グループによって多少の差異はあるものの、1回の授業において12回程度の鬼遊びが各グループで行われた。なお鬼遊びは全て「体ほぐしの運動」として、児童間の交流に主眼をおいて実施された。また順序効果を相殺できるように、鬼遊びの実施に際しては両クラスにて実施順序を逆にした。

結果

児童の援助自己効力感に対する鬼遊びの効果

鬼遊びの種類(なかま鬼・しっぽ取り)及び調査時期(実施前・実施後)を独立変数、援助自己効力感を従属変数として、反復測定による分散分析を実施した。その結果、調査時期の主効果が有意であり($F(1,49) = 14.99, p < .01, \eta^2 = .07$)鬼遊び実施前よりも実施後の方が援助自己効力感が高かった。なお、鬼遊びの種類の主効果($F(1,49) = .44, p = .51, \eta^2 = .01$)及び両独立変数の交互作用($F(1,49) = 1.45, p = .24, \eta^2 = .01$)についてはいずれも認められなかった(表1)。

ここで、鬼遊び実施前後の援助自己効力感について鬼遊びの種類別にt検定(両側検定)を行った結果、なかま鬼においては平均値の差が有意($t(49) = 4.01, p < .01, d = .32$)でありなかま鬼実施前より実施後の方が高かった一方、しっぽ取りにおいては平均値の差は有意ではなかった($t(49) = 1.86, p = .07, d = .19$)。以上の結果から、全体として本研究で行われた鬼遊びへの参加を通じて児童の援助自己効力感が高くなることを示す結果が得られたものの、その変容はなかま鬼への参加によって説明される部分が大きいと考えられた。

鬼遊びの種類による援助・被援助行動の差違

鬼遊び中の援助・被援助行動に対する主観的評価及び援助・被援助行動の各実数について、鬼遊びの種類(なかま鬼・しっぽ取り)による差違を検討した。t検定(両側検定)の結果、なかま鬼の方がしっぽ取りよりも、援助行動に対する主観的評価($t(49) = 8.82, p < .01, d = 1.51$)、被援助行動に対する主観的評価($t(49) = 10.96, p < .01, d = 1.84$)の他、積極的援助($t(49) = 8.62, p < .01, d = 1.74$)、消極的援助($t(49) = 6.88, p < .01, d = 1.40$)、援助行動の総数($t(49) = 9.84, p < .01, d = 1.98$)の各援助行動の実数、さらに直接的被援助($t(49) = 11.16, p < .01, d = 2.24$)、互惠的被援助($t(49) = 16.64, p < .01, d = 3.33$)、強制的被援助($t(49) = 4.68, p < .01, d = .94$)、間接的被援助($t(49) = 2.33, p < .05, d = .47$)、被援助行動の総数($t(49) = 21.46, p < .01, d = 4.23$)の各被援助行動の実数において平均値が有意に高かった。一方、間接的援助($t(49) = 1.04, p = .30, d = .21$)においてのみ、鬼遊びの種類による差は認められなかった。以上の分析から、なかま鬼はしっぽ取りと比較して、援助・被援助行動の主観的

表1 各条件の記述統計量と分散分析の結果

		参加前		参加後		交互作用	主効果	
		Mean	SD	Mean	SD		時期	種類
鬼遊び	なかま鬼	3.26	.60	3.45	.59	1.45	14.99**	.44
	しっぽ取り	3.26	.53	3.37	.62	.01	.07	.01

交互作用・主効果：上段F値，下段 η^2

** $p < .01$

評価が高く、間接的援助を除く援助行動・被援助行動の実数においても、多いことを示す結果が得られた(表2)。

なおしっぽ取りでは援助行動の総数16回、被援助行動の総数は0回となり、なかも鬼の536回、1481回と比較して極めて少なかった。このことから以下の分析については、なかも鬼の

データのみを利用して実施した。

なかも鬼における援助・被援助行動に対する主観的評価と実数の関係

なかも鬼における援助・被援助行動に対する主観的評価と実数の相関係数を算出したところ、表3, 4に示したように、援助行動に対する主観的評価と積極的援助 ($r = .29, p < .05$) 及

表2 援助・被援助行動に関する t 検定の結果

	なかも鬼		しっぽ取り		t 値	d
	Mean	SD	Mean	SD		
援助行動に対する主観的評価	3.18	.69	1.86	1.03	8.82 **	1.51
被援助行動に対する主観的評価	3.08	.75	1.68	.77	10.96 **	1.84
積極的援助	7.78	6.28	.06	.31	8.62 **	1.74
消極的援助	2.54	2.48	.06	.31	6.88 **	1.40
間接的援助	.40	.64	.26	.72	1.04	.21
直接的被援助	5.04	3.19	.00	.00	11.16 **	2.24
互惠的被援助	23.54	10.00	.00	.00	16.64 **	3.33
強制的被援助	.94	1.42	.00	.00	4.68 **	.94
間接的被援助	.10	.30	.00	.00	2.33 *	.47
援助行動の総数	10.72	7.38	.32	.96	9.84 **	1.98
被援助行動の総数	29.62	9.76	.32	.96	21.22 **	4.23

df = 49

** $p < .01$, * $p < .05$ (両側検定)

表3 援助行動に対する主観的評価と実数との相関関係

	積極的援助	消極的援助	間接的援助	援助行動の総数
	r			
援助行動に対する主観的評価	.29 *	.04	.02	.26
積極的援助		.20	.18	.93 **
消極的援助			.25	.53 **
間接的援助				.32 *

** $p < .01$, * $p < .05$

表4 被援助行動に対する主観的評価と実数との相関関係

	直接的被援助	互恵的被援助	強制的被援助	間接的被援助	被援助行動の 総数
	<i>r</i>				
被援助行動に対する 主観的評価	.32 *	.13	.08	-.04	.25
直接的被援助		-.19	.41 **	-.05	.19
互恵的被援助			-.29 *	-.11	.92 **
強制的被援助				.39 **	.00
間接的被援助					-.04

** $p < .01$, * $p < .05$

び、被援助行動に対する主観的評価と直接的被援助 ($r = .32, p < .05$) の間においてのみ相関関係が有意であった。

他方、援助行動間においては、援助総数は積極的援助 ($r = .93, p < .01$) との間で、被援助総数は互恵的被援助 ($r = .92, p < .01$) との間で極めて強い相関関係にあることを示す結果が得られた。以上の結果、援助・被援助行動に対する主観的評価と実数の間の相関関係は、援助行動では積極的援助、被援助行動では直接的被援助との間でのみ認められたほか、援助行動では積極的援助が、被援助行動では互恵的被援助がよく行われたことを示す結果が得られた。

なかま鬼実施後の児童の援助自己効力感に及ぼす援助・被援助行動の影響

なかま鬼実施前の援助自己効力感、援助・被援助行動に対する主観的評価に加え、援助・被援助行動の各実数を独立変数、なかま鬼実施後の援助自己効力感を従属変数としてステップワイズ法による重回帰分析(変数増加法)を行った(表5)。2回のステップを経て2つの独立変数が投入された結果、重回帰分析は有意であり ($F(2,47) = 61.54$, 調整済 $R^2 = .71, p < .01$), なかま鬼実施前の援助自己効力感 ($\beta = .79, t = 9.92, p < .01$) 及び、なかま鬼参加中に行った援助行動に対する主観的評価 ($\beta = .17, t = 2.12, p < .05$) が、なかま鬼実施後の援助自己効力感を規定することを示す結果が得られた。

表5 なかま鬼実施後の援助自己効力感を規定する要因

ステップ2	なかま鬼実施後の 援助自己効力感	
	β	<i>r</i>
なかま鬼実施前の 援助自己効力感	.79 **	.84 **
援助行動に対する 主観的評価	.17 *	.38 **
調整済 R^2	.71 **	

** $p < .01$, * $p < .05$

考察

なかま鬼への参加による児童の援助自己効力感の変容

分析の結果、本研究で行われた鬼遊びへの参加を通じて児童の援助自己効力感が高まることを示す結果が得られたものの、その変容がなかま鬼への参加によるものであることを明確に示す結果は確認できなかった。

上野ら(2018)による結果とは異なり、本結果はなかま鬼に限らずしっぽ取りへの参加であっても援助自己効力感が高まることを示すものであった。ただし鬼遊び前後の援助自己効力感について鬼遊びの種類別に比較した結果では、なかま鬼の前後では援助自己効力感が高まっていたのに対して、しっぽ取りの前後では援助自己効力感の有意な変化は認められなかつ

た。従って、本研究における鬼遊びの影響については、ななかま鬼への参加によって説明される部分が大きかったと理解できる。効果量に明らかのように、ななかま鬼への参加が援助自己効力感に及ぼす影響が低いレベルに止まっていたことから、調査時期と鬼遊びの種類間に交互作用が認められるまでには至らなかったと考えられた。

上野ら(2018)の研究結果においては、調査時期と鬼遊びの種類による交互作用の効果量は高いレベルを示していた。その理由として、ななかま鬼への参加の効果が認められただけでなく、しっぽ取りへの参加者の援助自己効力感が鬼遊び参加前後で低下していたことが挙げられる。仲間を助けることができたり、捕まってもまた復活できるルールを採用しない鬼遊びでは走力や敏捷性に長けた児童が活躍する一方、そうした能力に劣る児童は無力感を形成しやすいと考えられる。さらに自分が捕まらないことのみを優先する環境下では、援助自己効力感の高まりは期待しづらい。こうした鬼遊びと比較した場合、ななかま鬼は援助自己効力感を高める上で一定の役割を果たすと予想されるが、ななかま鬼自体が援助自己効力感に及ぼす影響は、それほど大きくない可能性が窺われた。

ななかま鬼における援助・被援助行動の特徴

分析の結果、先行研究と同様にななかま鬼はしっぽ取りと比較して援助・被援助行動の主観的評価が高かったほか、間接的援助を除く援助行動及び被援助行動の実数においても、ななかま鬼の方がしっぽ取りよりも多いことが明らかになった。

しっぽ取りは参加者同士での直接的な助け合いを促進するルールを含まない鬼遊びである一方、ななかま鬼は上野(2014)が参加者の援助行動を促進する目的で開発した鬼遊びである。既に上野ら(2018)において、ななかま鬼の方がしっぽ取りよりも援助行動及び被援助行動に対する主観的評価が高く、それぞれの頻度が多いことが明らかにされている。3年生を対象とした本研究においても同様の結果が認められたことから、5年生だけでなく3年生においても、ななか

ま鬼への参加中に仲間を沢山助けると共に、仲間に沢山助けられたと認識することが明らかになった。

また本研究では、ビデオカメラによる録画映像をもとに、実際にななかま鬼及びしっぽ取りの最中に実施される援助・被援助行動について確認した。その結果、仲間が鬼の気を引いて助けたり、鬼をブロックすることで逃がすなどの間接的援助を除いて、ななかま鬼の方がしっぽ取りよりも援助・被援助行動の実数が多かった。ななかま鬼では直接的な援助が可能であるほか、近くの仲間同士で互いに援助し合う互惠的援助が行われやすい状況にあることから、間接的援助についてはあまり行われなかったのではないかと考えられた。

他方、児童らが鬼遊び中に実際に経験する援助・被援助行動と、彼らが経験したと主張する援助・被援助行動の頻度の間には相応の関係性が認められることが予想された。そこでななかま鬼における両者の相関関係を確認したところ、援助行動に対する主観的評価と積極的援助及び、被援助行動に対する主観的評価と直接的被援助との間で相関関係が認められた。しかし、両者の関係は共に当初予想していたほど大きい値ではなかった。データからは、実際には援助・被援助行動を経験していないにも関わらず、主観としては実際よりも沢山経験したと認識している児童が少なくないと考えられた。本結果については、ななかま鬼では頻繁に援助・被援助行動が繰り返されることから、実際の経験と記憶の間に齟齬が生じることによるのではないかと考えられた。

ななかま鬼への参加を通じた児童の援助自己効力感の変容を説明する援助・被援助行動

ステップワイズ法による重回帰分析の結果、ななかま鬼実施前の援助自己効力感、ななかま鬼参加中に行った援助行動に対する主観的評価の順にななかま鬼実施後の援助自己効力感を説明することを示す結果が得られた。

ななかま鬼参加中に児童は沢山の援助・被援助行動を経験する。従って、鬼遊びに含まれる援助経験が援助自己効力感の変容に影響を及ぼす

ならば、なかま鬼実施後の援助自己効力感は、なかま鬼実施前の援助自己効力感の高さに加え、鬼遊び中に経験する援助行動によって説明されると考えられた。そして本研究の結果は、鬼遊び実施後の援助自己効力感は、援助行動の実数よりも援助行動に対する主観的評価によって説明されることを示していた。

しっぽ取りとの比較からも、鬼遊び自体に援助行動が含まれていなければ、鬼遊びへの参加を通じた援助自己効力感の変容は起こりにくいと言える。一方で、なかま鬼への参加を通じた援助自己効力感の変容は実際に行った援助行動の頻度ではなく、仲間を助けたと認識した主観的評価によって説明された。援助行動には積極的に仲間を助けた行動だけでなく、消極的に援助した経験も含まれることから、援助経験の総数が援助自己効力感を説明する要因にはならないとは予想された。そして本研究の結果は、自ら積極的に行った援助行動の実数でもなく、援助頻度に対する児童の主観的評価によって説明されることを示していた。

積極的援助等の援助・被援助行動は、録画映像をもとに研究協力者により実数の記録が行われた。従って、客観的には援助・被援助行動と判定される行動であったとしても、鬼遊びを楽しんでいる児童自身が積極的に援助したと認識し、また記憶している行動とは異なる可能性がある。一方で援助行動に対する主観的評価は児童自身による援助・被援助経験に関する評価であり、児童にとっての事実であると言える。本結果から、援助自己効力感の変容には援助行動の実数ではなく、援助行動の頻度に対する児童自身の認識が影響を及ぼす可能性が示唆された。

まとめ

本研究では香川県内の公立小学校に通う3年生児童50名を対象として、児童の援助行動に注目した鬼遊び(なかま鬼)を体育授業において実施し、児童の援助自己効力感の変容を確認すると共に、その変容に鬼遊びにおける援助・被援助行動が及ぼす影響について検討した。

本研究の結果、鬼遊びへの参加を通じて児童の援助自己効力感が高まることを示す結果が得られたものの、なかま鬼への参加が援助自己効力感の変容に及ぼす影響については確認できなかった。一方で、援助行動を含まない鬼遊びと比較した場合、なかま鬼は援助自己効力感を高める上で一定の役割を果たすと考えられるが、なかま鬼自体が援助自己効力感に及ぼす影響は、それほど大きくない可能性が窺われた。

またなかま鬼ではしっぽ取りと比較して、非常に多くの援助・被援助行動を経験できるものの、なかま鬼実施後の児童の援助自己効力感を説明するのは、なかま鬼実施前の援助自己効力感及び児童の援助行動に対する主観的評価であった。本結果から、援助自己効力感の変容には援助行動の実数ではなく、援助行動の頻度に対する児童自身の認識が影響を及ぼす可能性が示唆された。

付記

本研究は、科学研究費補助金(基盤研究C, 課題番号:16K01622, 研究代表者:上野耕平)の助成を受けて行われました。

文献

- Bandura, A. (1977) Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84: 191-215.
- Midlarsky, E. (1991) Helping as coping. In: Clark, M. S. (Ed.) *Prosocial behavior*. Sage: Newbury Park, CA, pp.238-264.
- 文部科学省(2018) 小学校学習指導要領(平成29年告示). 東洋館出版社:東京.
- 高木修(1998) 人を助ける行動—援助行動の社会心理学—. サイエンス社:東京.
- 東京都教育庁指導部指導企画課(2016) オリンピック・パラリンピック学習読本高等学校編. 東京都教育委員会.
- 友添秀則(2005) 体育の存在意義を考える—人間形成の立場から—. *体育科教育*, 53(10): 62-65.
- 上野耕平(2014) 援助行動を含む鬼ごっこ(お助け鬼・なかま鬼)への参加が児童の援助自己効力感に及ぼ

す影響. 鳥取大学大学教育支援機構教育センター
紀要, 11 : 75-84.

上野耕平 (2017) 運動あそびにおける援助経験が児童
の援助自己効力感に及ぼす影響. 香川大学教育学
部研究報告 I, 146 : 57-65.

上野耕平・山神眞一・石川雄一・野崎武司・宮本賢作・
米村耕平・前場裕平・大西美輪・山路晃代・山本健太・
増田一仁・倉山佳子・三宅健司・石川敦子・山西
達也 (2018) 児童の援助行動に注目した鬼遊びの体
育授業における実践. 香川大学教育実践総合研究,
36 : 33-40.